みんなで語ろう民放史

題字　中川　順

３５０時間ラジオ生放送

ラジオ福島　業務センター　編成局長

菅野　左千男

観測史上最大、マグニチュード９・０の激震が東日本を襲ったのは２０１１年３月11日14時46分。

ラジオ福島では午後の看板ワイド番組『かっとびワイド』エンディング前の最終コーナーが、シンガーソングライターの普天間かおりさんと地酒メーカー榮川酒造の社長宮森優治さんの２人のゲストと共に和やかに進められていた。「お、地震ですね。いま揺れております。スタジオの中も揺れております。皆さん身の安全を確保してください。大きな地震が起きております。身の安全を確保してください・・・」。

番組担当アナの深野健司が即座に身の安全の確保を呼びかけたのは揺れを感じてから４秒後。いつもの地震とは明らかに何かが違っていた。

「建物の中が危険と感じたら屋外に出てください。沿岸付近の方はすぐに海岸線から離れ高台に避難してください」、揺れが収まるまで２分20秒間、この言葉を繰り返していた。

揺れが収まる頃、震度情報が届いた。宮城県震度６強（後に震度７に修正）、太平洋沿岸に大津波警報が出された。１時間後、かろうじて稼働を続けた共同ニュースと気象庁の防災システムは、巨大津波の来襲と甚大な被害を次々に伝え、３５０時間14分の生放送が始まった。

インターネットも含め、多くの通信インフラが使えなくなる中、番組スタッフの持っていたｉ－ｐｈｏｎｅでネット接続できることが判明、早速Ｇｍａｉｌのアカウントを作り、市民に情報提供を呼びかけた。地震発生から2時間後だ。メールで寄せられた情報をラジオとツイッターで発信するネット連動の災害放送がスタートした。

不安を抱えながらの打合せ

震災直後の取材と生中継

社員数55人、中継車はたったの２台。ラジオ福島は地方局では珍しいＡＭ単営局だ。

福島県は、全国で３番目という広い面積だ。報道専任部署も無く、中継車をどんなにうまく走らせても被災状況の全ては伝えきれない。しかし迷っている時間は無かった。

震災発生からしばらく経った15時過ぎ、取材先や休日だった社員も強い余震の続く中次々に駆けつけて、急場しのぎの取材体制作りが始まった。

最初に出発したのは中堅アナの手塚伸一と女性アナの山地美紗子だ。手塚は技術スタッフとともに災害対策本部が設置されるであろう福島県庁へ、そして、山地は福島市内の取材だ。

普段なら局から15分もあれば行ける県庁だが、渋滞に巻き込まれ1時間以上もかけてようやく辿り着く。

しかし、災害対策本部が設置されるはずの福島県庁本庁舎は損壊が激しく、隣の敷地の自治会館に災害対策本部が作られていた。

16時16分、山地は壊れた県庁東分庁舎や福島市内の様子を、そして、16時45分、災害対策本部に設置された仮設ワイド無線中継で、手塚が災害対策本部から刻々と発表される被害の状況を伝えた。

一方、若手のアナ和泉義治はモバイルスタジオと携帯電話の中継セットを持って郡山市に向かった。

しかし、モバイルスタジオも携帯電話も一切繋がらない。「郡山市内は各地で渋滞です、郡山警察署付近の電気量販店の壁が崩れていました。郡山開成では電線が切れているところがあります。これから取材にあたります」…。スタジオから送られたメールで唯一携帯のメールのみが使えることを知った和泉は次々に携帯メールから情報を送り始めた。

大地震の発生から2時間後、ワイド番組の中で地震の一報を伝えた深野健司は、中継車に乗り込んで浜通り北部の相馬市に向かった。

福島と海沿いの相馬市を最短で結ぶ国道115号は通行止めとなっており、後に計画的避難区域となって全村避難を強いられることになる飯舘村を迂回して相馬を目指す。途中、住宅や商店、自動販売機や信号など、普段は街路を明るく照らす全ての灯りが消え、暗闇の世界が広がる。そうした中で深野は、住宅や路肩に停められた車の中に見えるほのかな灯りを何度も見かけたという。車に避難し暖をとる人々だ。深野の脳裏には、カーラジオに耳を傾ける人々の姿がよぎった。

震災翌日瓦礫の広がる相馬で

相馬市内に入ると辺りには津波で倒壊した家屋が現れ、海から数キロも離れた国道6号でも磯の香りが漂っている。見慣れた風景とはあまりにも違う非情な現実に言葉を失いながら辿り着いた避難所でマイクを向けた。ストーブを囲むように座り暖をとっていた人々の口からは、つい今しがた起きた出来事のように災害の様子がとめどなく語られる。

「松川浦大橋が津波でかくれた」「人が乗ったままの車がたくさん流されていった」「がれきを巻き込んだ黒い泥水の壁が襲ってきた」…。

深野は想像を絶する凄まじい証言に震えが止まらなかった。

また、ネットと放送の連動を図るため急きょ震災特設サイトと震災ポータルサイトを立ち上げたラジオ福島の震災ポータルサイト

かろうじて作ったこの取材班も、3月14日の東京電力第1原子力発電所3号機の水素爆発で、数日間は浜通りに近づけない日が続いた。

ネット連動で生まれたリスナーとの絆

阪神・淡路大震災の時とは比較にならないくらい進歩したインターネット。今回の災害報道で大いにその力を発揮したのがホームページとツイッターだ。

水がない、炊飯器がない、そんな情報を放送と共にツイッターでつぶやくとあっと言う間に返事が返ってくる。リスナーとの2WAYが確実に被災した方々の役に立っている。スタッフはそれを実感した。

災情報センターを立ち上げた。
　総務局長を筆頭に、企画事業部、放送部、放送業務センターの4つの部署からなる6人の混成チームだ。ここで取材した情報コンテンツを、まずネットで発信し、それを印刷出力したものを放送原稿に使う仕組みを作った。
　加えて今回は、インターネットによる音声配信も行った。
　3月13日、r・a・d・i・k・oは東日本大震災に対応するため、その時点で配信を開始していた関東7局・関西6局のエリア制限を解除した。ラジオ福島と茨城を含む東北のラジオ各社は直ちにこの枠組みに加えてくれるようｒａｄｉｋｏ社に協力を要請した。
　特に、福島県は前述のように全国3番目の広大な県土を持ち、震災前から難聴地域を抱えていた。さらに、浜通り北部の原町放送局の中継回線が途切れたため、東京電力第1原子力発電所の事故で避難や屋内退避を迫られる浜通りや阿武隈高地の市町村に十分な情報が届けられない。しかも、原子力災害を伴った複合災害で県外への避難者が急増することが予想され、県外への音声配信は不可欠だった。
　しかし、ｒａｄｉｋｏ東北版立ち上げは、ｒａｄｉｋｏ社とすでに配信を始めていた13社、そして、被災県各社の足並みが揃わず、3月中旬には断念を余儀なくされた。そして、この取り組みは4月下旬のｒａｄｉｋｏ復興支援プロジェクトを待つことになる。
　一方、ｒａｄｉｋｏ東北版に関連して連絡を取り合う中で、在京のA・M社の技術担当からU・S・T・R・E・A・Mを使ってはどうかというアドバイスがあった。早速3月15日からUSTREAMの配信を始めたが、すぐに問題が生じた。
　私たちの放送は、災害放送としては異例かもしれないが、市民の心を和らげてもらうため早い時期から音楽を流していた。インターネットでの楽曲配信は権利上の問題がある。止む無く一旦配信をとめた。すると、USTREAM Asiaから連絡が入った。USTREAM社では公益性が高いと判断し、楽曲の権利処理交渉やネットワーク監視のもとでの安定的な配信ができるよう支援してくれることになった。
　このUSTREAMのバックアップにより私たちは心置きなく緊急災害放送を続けることができ、多くのメッセージをいただいた。特に、私たちを驚かせたのは海外からの反響だ。ボストン、ケニア、モントリオール・・・。福島出身で今は外国で暮らす方々、そして、福島に住んだことのある外国人の方々から寄せられた。
　多くの福島ゆかりの人々が、私たちの放送を通して東京電力福島第1原子力発電所事故の推移を見守り、励ましのメッセージを贈ってくれた。
　これには私たち番組の送り手も、ラジオを聴く県内リスナーも勇気を与えてもらった。

radiko復興支援プロジェクト

ラジオNIKKEIが特別編成

　また、ラジオNIKKEIは『がんばろう福島（rfc）ラジオ福島発～』と題して、3月15日から3月31日までの毎日、1時間から2時間にわたりラジオ福島の放送をそのまま放送する特別編成を組んでくれた。
　ラジオNIKKEIはｒａｄｉｋｏ配信の先発組で、エリア制限無しに全国で聞くことができる。このラジオNIKKEIの協力で、私たちの元には県域ラジオのエリアを越える様々な情報がたくさん寄せられるようになった。被災地以外のラジオNIKKEIのリスナーが、メールやツイッターなどで広く情報を伝え、その情報が元で家族や知人の安否が判明するというケースさえあった。
　今回の震災報道で再認識させられたのが、ネットとの親和性。
　ラジオとネットを連動させれば、リスナーとの2WAYの絆は確実に深まる。リスナーに必要とされる放送局であるためにインターネットが果たす役割はきわめて大きいと言える。

備えが無かった原発事故

震災発生から約2時間。少しずつ災害時優先電話からの発信が相手先につながるようになってきた。市町村、警察、消防などへの電話取材が始まった。もちろん地震の際の取材先リストには東京電力も含まれている。いつもの地震だと「定期点検中の○号機を除き平常運転中」と答えが返ってくるが、この時の返答は「調査中」。調査に値する何らかの異変が起きているのだろうと思えたがこの段階では津波関連の取材を優先せざるを得なかった。

この後、20時台、共同通信が原子力安全・保安院の発表として、原発の外部からの電力供給が停まったことを伝えてきた。そして20時45分、県の災害本部から生中継で佐藤雄平知事による非常事態発生の報告と東京電力福島第1原子力発電所2号機の水位低下が伝えられ、さらに21時23分、国は第1原発を中心とする半径3キロ圏の住民に原子力災害対策特別措置法に基づく避難指示を出す。

福島第1原発の事故を時系列に抜き出すと以下のようになる。

□3月12日

5・44　10キロ圏に避難指示
15・36　1号機が水素爆発
20・20　20キロ圏に避難指示
※約8万人が避難

□3月14日

11・01　3号機水素爆発
・夜　放射線量急上昇

□3月15日

6・10　2号機で異音発生
圧力低下
10・59　オフサイトセンターに避難指示
11・00　半径20～30キロ圏内屋内退避指示
・夜　放射線量急上昇

16日には福島市内で毎時20マイクロシーベルトを観測。22日には県内5市町村の水道水から放射性ヨウ素が検出された。

窓や換気口には目張り
外出にはマスクが必要だった

福島県は原発立地県であるにも関わらず、ラジオ福島には原子力災害への備えがまったく無かった。しかし、リスナーからは不安や疑問が数多く寄せられた。

こうした不安や疑問に答えるため、TBSラジオの科学記者崎山敏也さん、長崎大学大学院の山下俊一教授、毎日新聞元福島支局長で科学環境部長も務めた斗ヶ沢秀俊さんに解説を依頼、状況が刻一刻と変化する中、プラントの状況や健康への影響、行政の対応などをわかり易く解説していただいた。

この他、心のケアや避難生活の注意点、糖尿病など慢性病の患者に向けたアドバイスなど、様々な学識経験者への電話インタビューなどを放送し、そこで録りためた音声をサーバー上にアップし、県内に6局あるコミュニティFM局に提供した。

4月25日、警察庁長官の視察に同行し双葉町へ

ラジオ福島のスタジオは東京電力第1原子力発電所から75キロ離れた福島市にある。万一、福島市にも避難指示が出された場合、どうやって放送を継続するのか。

緊急災害放送を続ける傍らで、放送系スタッフはその対応の検討にも取り組まざるを得なかった。

3月12日から避難指示区域が次々に拡大し続ける中で出した結論は、東京電力第1原子力発電所から西に110キロある会津若松への退避だった。

技術スタッフは放送継続のための仮設機材をラジオ福島若松支社に運び最悪の事態に備えた。

後に報道される政府や東電の混乱ぶりを考えると、現在の冷温停止状態は技術者の努力の成果では

なく、偶然の産物のように思えてならない。

この仮設機材を使わずに済んで本当によかった、当時の状況を振り返る度に、その時の思いが甦る。

震災情報センター

復興に向けての取り組み

震災発生からおよそ3週間が経つ4月上旬、ラジオ福島の看板アナで当時編成局長だった大和田新の元に1枚のファックス届いた。

相馬市磯部の壊滅的な状況を克明に伝えるもので、家を流され毎日娘を探している母親、あても無く彷徨う犬、港を見つめ呆然と立ち尽くす漁師など、被災地からの声に大和田は胸が押しつぶされそうになった。

そして、手紙は最後に「現場を見てから、ものを言え！」と・・・。この手紙をきっかけに、大和田は週に一度浜の様子を生中継で伝える被災地リポートを半年間欠かさず放送した。

また、震災直後のナイターイン編成ではもう一本の復興支援番組『新と美智子のリクエストで120分』が走り出した。しかし、音楽は一切かからない。震災前に決めたタイトルを修正する間もなくそのまま走り出したもので、復興に向けて一途に取り組む方々をゲストに迎え、その活動や課題を生のロングインタビューで伝えるという企画だ。

新聞、雑誌、テレビが伝えることは、取材者の意思で出来事の断片だけが切り取られたものだ。

もちろんこの手法はメディアの役割を考えると極めて当然のあり方だが、大地震と津波、さらには原子力災害という複合災害に見舞われた福島県では、低線量被爆や風評問題など微妙な問題を抱えている。できる限りそこに生きる人々の本音を余すことなく伝えたい。そんな思いは、2012年ナイターイン編成にも引き継がれUSTREAM連動番組『月曜Monday～夜はこれから』がスタートした。

また、震災からちょうど1年となる2012年3月11日には、午前10時から19時までの間で延べ8時間の生中継番組『3・11特番ふくしまと共に～再生の足音～』を編成、津波に流されながらも奇跡の復活を遂げたいわき市立豊間中学校のピアノが再び校歌を奏でる模様と震災の犠牲となった人々の心情などを綴った、福島市の詩人和合亮一さんの詩集『震災ノート～ふたたびの春に』を朗読した。

復活した奇跡のピアノの伴奏で
校歌を歌う豊間中学校の生徒たち

この他、放射線関連の3人のスペシャリストに話を聞く『ホールボディーカウンター～調べてわかった被ばくの現状～』（60分2回シリーズ／YouTubeで公開中）や最先端の知識を持つ医師や科学者・社会学者が、放射性物質の環境・健康への影響について討議する『福島医学会緊急シンポジウム』を30分7回のシリーズ番組として放送した。

もちろん復興関連の情報番組や避難者の生の声を届ける番組なども月～金ベルトで複数編成している。全ての番組で共通するのは、地震・津波と原子力災害で避難を余儀なくされた方々に有益な情報を送り届ける事だ。

今も数万人の方々が県外に避難し、被災県で唯一、災害関連死で亡くなる方が増えている。避難者の方々が安心して故郷に戻る日が来るまで、福島に寄り添うラジオ局としてその役割を果たしたい。

最後になるが、2011・2012年の連盟賞などで私たちの取り組みに高い評価をいただいた。この事に感謝するとともに、今後とも復興に向けた番組制作に精一杯取り組んで行きたい。

資料提供　ラジオ福島

＊radiko・USTREAMについては26ページを参照